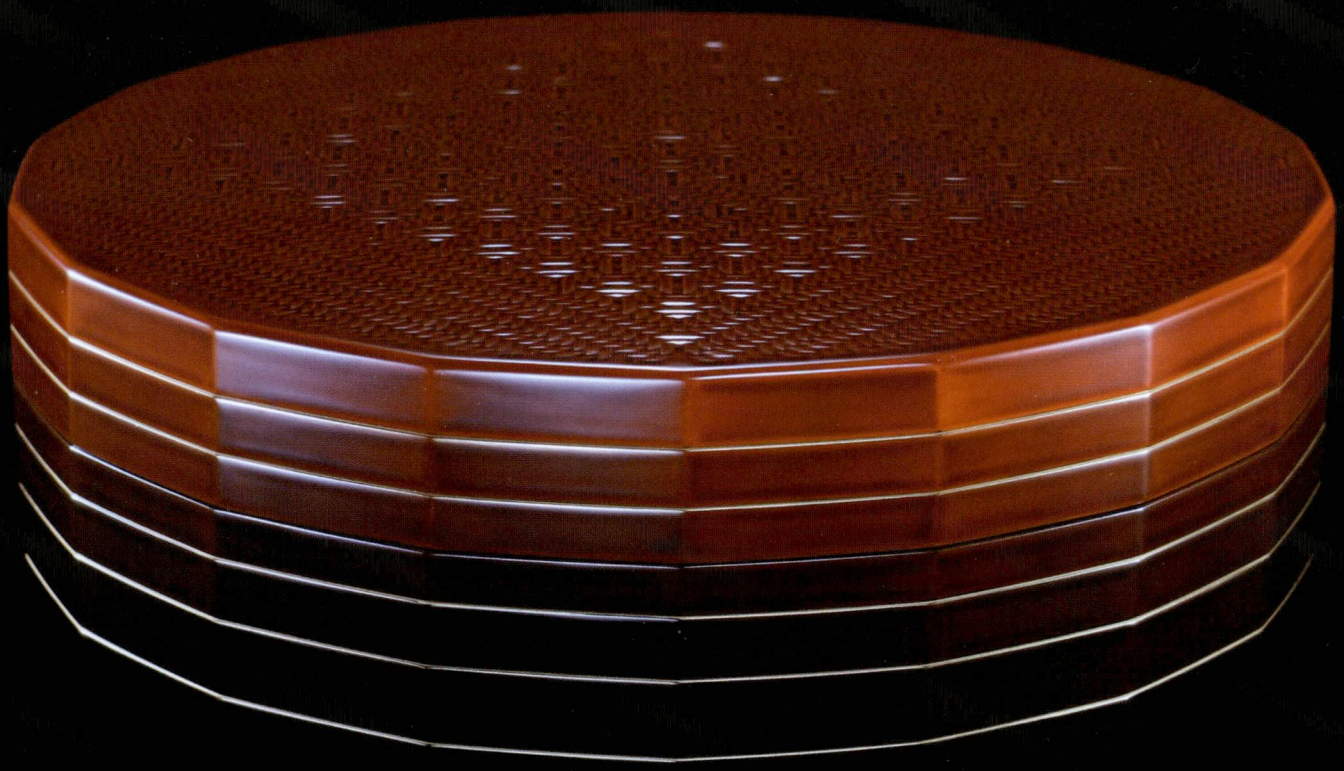
平成二十四年度工芸技術記録映画
35ミリ・カラー・37分
企画　文化庁
製作　桜映画社

髹漆（きゅうしつ）

小森邦衛のわざ

小森邦衛（こもりくにえ）にとって〈髹漆〉とは、自らが心に描く漆塗りの美を実現するために、榛地（そじ）の造形に始まり、下地、上塗りに至る全工程を一貫して行う、高度な技術を指す言葉にほかならない。緻密かつ長期にわたる制作を経て生み出される作品には、小森独自の豊かな情感が表れ、漆芸の新たな可能性が示されている。この映画は、石川県輪島市にある小森の工房を訪ねて、創作に挑む漆芸作家のわざとその姿勢を記録したものである。



髹漆（きゅうしつ）

小森邦衛のわざ

プロローグ

漆芸作家、小森邦衛の作品は多くの工程を経て、様々な道具によってつくられる。

真竹（まだけ）の入手

作品制作の最初の工程は、竹ひごの材料となる真竹の入手からはじまる。

漆芸技術研修所

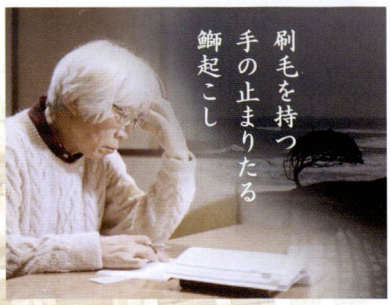
沈金の職人だった小森は、漆芸の人間国宝が講師を務める輪島市立漆芸技術研修所に入所。
技法の垣根を越えた漆芸の広がりと、作品制作に挑む作家たちの姿勢に目を見張る。

恩師たちとの出会い

髹漆の人間国宝、赤地友哉（あかじゆうさい）が講師として研修所に招かれたのを機に、小森は赤地の指導の下、髹漆家としての道を歩み始める。

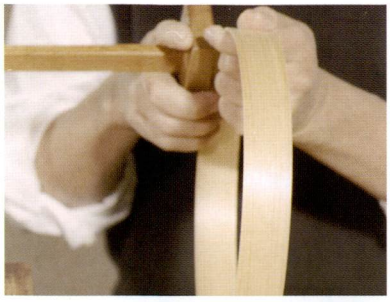
網代（あじろ）の制作

網代編みは、竹ひごを井桁状に配置し、くぐらせる本数を変えることによって模様をつくる技法である。用いる竹ひごは幅2mm、厚さ0.2mm。



もうひとつの創造・俳句づくり

小森は仕事の合間に、俳句をたしなんでいる。



曲輪の制作

小森の使う曲輪の材質は、木目が通って加工しやすいヒノキアスナロの柾目。設計図に従って、直径や高さの異なる曲輪を作る。

蓋の制作

桐の芯板に鉋をかけ、膨らみのある造形にした後、網代を圧着させて蓋の榛地を作る。

曲輪の組立て

曲輪造は、パーツごとに下地や漆塗りを行い、作品の形に組み立てながら確認していく作業の繰り返しである。

榛地の完成

小森の新しいデザインへの探求は、とどまるところを知らない。曲輪を多面体にすることで、作品に新たな個性を宿そうと考えたのだ。

研修所での指導

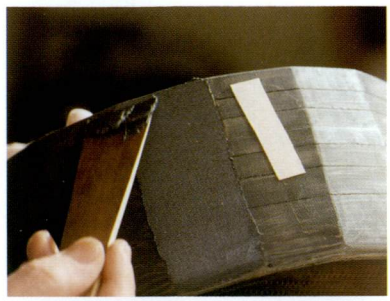
研修所の卒業生として最初の人間国宝となった小森。主任講師として生徒を指導する小森の視線は、かつてこの場で出会った大家たちのまなざしに似て厳しく、そして温かい。

布着せ

麻の布目が曲輪に斜めに乗るよう布を着せる。これにより、榛地の伸縮を抑制することができる。

髹漆（きゅうしつ）

小森邦衛のわざ



下地付け

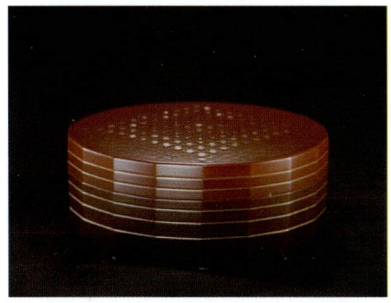
糊漆（のりうるし）に地粉（じのこ）を混ぜたものを、榛地に塗る。
徐々に粒子の細かい地粉に換えて塗り重ねていくと、肌に食いこみやすくなり、はがれにくくなる。

中塗り

漆を刷毛（はけ）で薄く塗り重ねていくことにより、小森は深みのある色を表現する。

上塗り

小森は塗立（ぬりたて）という仕上げ方にこだわる。漆本来の光沢と、刷毛の運びだけで、作品を仕上げていく技法だ。



完成作品・曲輪造籃胎十八稜食籠（まげわづくりらんたいじゅうはちりょうじきろう）

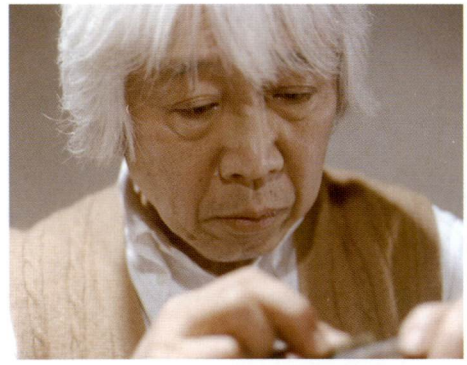
暗から明へと移りゆく朱の階調は、時の流れを表したもの。小森の心に去来する様々な時間が、透漆（すきうるし）の下に息づいている。

協力

石川県立輪島漆芸技術研修所
香川県漆芸研究所
輪島市
石川県輪島漆芸美術館
輪島市森林組合
能登島家族休暇村 We ランド
ギャラリー曜燿　金澤美術
中長小西

製作スタッフ

製作 山本孝行
脚本・演出 井上実
演出補佐 土井康一
撮影 八幡洋一
撮影助手 藤原千史　今野聖輝
照明 江森清八
照明助手 野本敏郎
録音 荒井富保
効果 柴崎憲治
編集 石井香奈江
音楽 清水健太郎
ネガ編集 幸地甫之
タイトル 津田輝王　関口里織
録音スタジオ アオイスタジオ
現像 IMAGICA
ナレーター 井上和彦



小森邦衛 こもり・くにえ

昭和20年（1945）、石川県輪島市に生まれる。輪島で沈金（ちんきん）技法を習得した後、同50年から石川県立輪島漆芸技術研修所髹漆科（きゅうしつか）聴講生となり、講師の赤地友哉（おおたひとし）に曲輪造技法を学び、太田儔（ひとし）から籃胎（らんたい）技法について指導を受けた。
曲輪造技法と籃胎技法とを組み合わせた榛地の造形、網代の文様と漆の塗りぼかしの組み合わせなど、多彩な髹漆技法を駆使した気品あふれる作品は、高い評価を得ている。
平成18年（2006）、国の重要無形文化財「髹漆（きゅうしつ）」の保持者（人間国宝）に認定される。